

不退寺の仏像

不退寺には、平安時代（794-1185）の木造仏像が多数ある。この寺の本尊は観音菩薩像である。この高さ 1.9 メートルの桂の木の像は、不退寺の開祖である歌人・在原業平（825～880 年）が、自らの理想の女性像として彫ったと伝えられている。明治時代（1868-1912）まで、この像は一般から秘匿されていた。1600 年代後半の記録である『和州寺社記』によれば、この像を見ることができたのは住職だけで、在職中に一度だけ拝見することを許されたという。

伝承によれば、この像は 9 世紀の作であるが、仏像のデザインにはその 100 年後頃に彫られたことを示唆する要素がある。大きな髷、垂れた髪の毛、はっきりとしたうねのある衣の襷などがある。もう一つの注目すべきデザイン要素は、冠の両側にある大きなリボンである。現在では彩色の多くが剥げ落ち、その下の木がむき出しになっているが、元々は白い基礎と鮮やかな色彩の花柄で彩られていた。この像は 2022 年に顔料の剥落止めや継ぎ目の変色の修整のための大規模な保存修理が施された。

不退寺の本堂には五大明王像も安置されている。他の仏像の穏やかで平和な表情とは異なり、これらの仏体の怒りに満ちた顔は、人々を仏の道から遠ざける世俗的な煩惱に対する

怒りを表現している。それぞれの像は檜を何枚も組み合わせて作られている。五体の明王は、
軍荼利明王、降三世明王、不動明王、金剛夜叉明王、大威徳明王の五尊である。

これらの像は 900 年代から 1100 年代にかけて彫られたと考えられているが、不動明王像
(右手前の坐像) に象眼された水晶の目は、鎌倉時代以降に付け加えられたものである。

五体の明王像は、本堂に安置される前、金堂と呼ばれたお堂に安置されていた。五体のうち
不動明王だけが平らな台座の上に安置され、伝統的な火焰光背が飾られている。他の 4 体

の像は、1914 年の修理の際に玉石の形をした台座の上に安置されたと考えられている。